

高等学校（看護）教育実習評価表作成に向けての文献検討

Review of literature for creating a high school (nursing) training evaluation table

岡 和子* 岡本 陽子 渡邊 満

Kazuko Oka* Yoko Okamoto Michiru Watanabe

要旨

教育実習評価についての研究は、学校種や教科によるものなどがあるが、高等学校（看護）教育実習評価の研究は現在まで行われていない。そのため、本稿は、教育実習評価に関する研究動向と、高等学校（看護）の教育実習評価に関する課題を明確にし、高等学校（看護）教育実習の自己評価表を作成するための示唆を得ることを目的とする。CiNii Articlesで「教育実習」「評価」で得られた123件を分析対象とし、内容で分類した結果、「評価基準の改善・開発」、「自己評価」「実習校教員評価と学生の自己評価との比較」、「教育実習前後の自己評価の比較」、「教育実習評価と他の評価との関連」「実習校指導教諭からの評価を分析」に分類された。また、評価表の作成が、学生、大学教員、実習校教員が納得できる評価規準の必要性とともに、学生が教育実習で自己評価を行うことによりリフレクションの機会となり、教職に向けて更なる自己成長を促すこととなりうることを示唆された。

Abstract

Research on evaluation of teaching practice has been conducted by school type and subject, but research on evaluation of high school (nursing) teaching practice has not been conducted to date. The purpose of this study was to clarify the research trends related to the evaluation of teaching practice and issues related to the evaluation of high school (nursing) teaching practice, and obtain hints for the creation of a self-evaluation table for high school (nursing) teaching practice. A total of 123 papers among CiNii articles regarding "teaching practice" and "evaluation" were analyzed, and the papers were classified by content as follows: "Improvement/development of evaluation criteria", "Self-evaluation", "Comparison of training school faculty evaluation and student self-evaluation", "Comparison of self-evaluation before and after teaching practice", "Relationship between teaching practice evaluation and other evaluations", and "Analysis of evaluations from training school faculty." The results suggested that when creating an evaluation table, evaluation criteria that can be easily understood by students, university faculty, and faculty of schools where teaching practice is conducted are needed and providing students with opportunities for reflection by conducting self-evaluation in teaching practice, which may promote further self-growth as the students aim to become teachers.

キーワード：教育実習 評価 教育実習（看護）

Key Words : Teaching practice, evaluation, teaching practice (nursing)

I. 緒言

2006(平成 18)年の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度のあり方について」¹⁾では、「教育実習は、学校現場での教育実践を通して、学生自らが教職の適性や進路を考える貴重な機会である」とされている。さらに、2015(平成 27)年の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」²⁾では、「養成段階は、教員となる際に必要な最低限の基礎的・基本的な学習を行う段階であることを認識させ、実践的指導力の基礎の育成に資すると共に教職課程の学生に自らの教員としての適正を考えさせる機会として、学校現場や教職を体験させる機会を充実させる必要がある」とされている。2017(平成 29)年 11 月には「教職課程コアカリキュラム」³⁾が策定され、「教職に関する科目」について基準が定められた。教育実習における全体目標は、「観察、参加、実習という方法で教育実践に関わることを通して、教育者としての愛情と使命感を深め、将来教員になるうえでの能力や適性を考えるとともに課題を自覚する機会である。」とあり、さらに内容のまとまりごとに一般目標が定められ、それに到達するための基準が設けられた。しかし、学校種や教科については個々の大学に任せられ今後も順次整備されることになっている。

教育実習は教職課程コアカリキュラムの「教職実践」に関する科目であり、学生が教育実習で何をどのように学び目標が達成できたかを評価することは重要である。「教職課程コアカリキュラム」が策定される以前は、教育実習における国の基準は示されていない。

2006(平成 18)年に「教職実践演習」が必修化され、その到達目標は卒業までに教員として最低限必要な資質能力が身についているかを確認するものである。しかし、「教職実践演習」は 4 年次の後期に履修し、全学年を通じた学びの集大成として位置づけられるものである⁴⁾。教育実習評価についての研究は、学校種によるもの、教科によるものなどあるが、高等学校(看護)教育実習評価についての研究は現在まで行われていない。そのため、2006 年(平成 18 年)中央教育審議会答申以降の教育実習評価に関する文献をレビューし、分析を行うことにより、高等学校(看護)教育実習評価の研究への示唆を得たい。

II. 目的

日本における教育実習評価に関する研究動向を明らかにし、教育実習の評価に関する課題を明確にして、高等学校(看護)教育実習研究と自己評価表の作成への示唆を得ることを目的とする。

III. 方法

1. 研究方法

2006(平成 18)年の中央教育審議会答申から、文部科学省によって「教職課程コアカリキュラム」が策定され実施された 2019 年(令和元年)に至る 13 年間について CiNii Articles で「教育実習」「評価」をキーワードとして 290 件を検索し、そのうち 123 件を研究対象とした。教育実習評価について学校種別、研究内容別に集計しそれぞれの内容について検討した。研究期間は、2018 年 3 月～2020 年 12 月である。

2. 倫理的配慮

著作権の侵害にならないよう文献の引用、参考文献名および、引用・参考箇所を明確に示した。本研究は広島文化学園大学看護学部倫理委員会の承認を受けた。(審査番号 1805)

IV. 結果

対象とした 123 件の文献結果を学校種に分類すると「幼稚園・保育園」33 件 (26.3%) 「中学校・高等学校」28 件 (22.8%)、「全体」20 件 (16.3%)、「小学校」14 件 (11.4%)、「小学校・中学校」12 件 (9.8%)、「中学校」7 件 (5.7%)、「高等学校」5 件 (4.1%)、「特別支援学校・学級」4 件 (3.3%) であった。そのうち教科に関するものは 29 件であった。

研究内容で分類すると、「評価基準の改善・開発」33 件 (26.8%)、「自己評価」30 件 (24.4%) 「実習校教員評価と学生の自己評価との比較」23 件 (18.7%)、「教育実習前後の自己評価の比較」16 件 (13.0%)、「教育実習評価と他の評価との関連」12 件 (9.8%) 「実習校指導教諭からの評価を分析」9 件 (7.3%) であった。

以下教育実習評価について研究内容での分類による詳細について述べる。

1. 評価基準の改善・開発

1) 教育実習全体の評価

教育実習全体の評価基準の改善・開発については、教職課程で入学時より使用しているポートフォリオ評価を教育実習に使用するもの⁵⁾、学生、実習校、大学の三者が納得できる評価基準を作成し、ルーブリックによる評価を行い使用後の結果を実習校に確認したものの⁶⁾、小学校教員として大学卒業時に養成すべき資質能力のスタンダードを開発するため、大学教員・実習校教員に調査を行いその資質能力を抽出し、それを全国の大学附属学校教員、公立学校教員、指導主事に調査し、スタ

ンダードを作成してそれを実習評価に生かすもの⁷⁾。教育実習全般と授業評価について、全国の教員養成大学付属の小・中・高等学校の主任に教育実習の実習形態と評価について調査し、結果から自己評価表を作成し、また、使用した結果を今後の指導に活かすもの⁸⁾、現状の評価表の基準を明確にし、教員間のずれをなくすもの。大学教員、実習校、学生の自己評価の一体化を目指したものがあつた⁹⁾。

評価基準の項目について 58 の大学に調査し、実習生が評価される観点について調査したものの¹⁰⁾。教育実習の到達目標を明確にし、実習担当者別評価表の作成をするもの。その担当者には、実習校の管理職による情意面の評価も含むもの¹¹⁾、自学を含む連携大学の「教育実習評価票」と東京都教育委員会の「教育実習成績評価票」とを比較し、教育実習評価表の現状と課題を探り、さらに有効な教育実習評価票作成に向けたもの¹²⁾などが見られた。

2) 授業等についての評価

授業等の評価基準の改善・開発は理科の初等・中等教員養成並びに採用初期の教員研修で育成が求められる教科指導を見定めルーブリックによる評価指標を作成し、学生に実習直前、中盤、直後に自己評価させ、利用可能性を検証するもの¹³⁾、指導案を大学の教員や実習前の学生が閲覧できるシステムを開発し、実習前には効果があつたが、実習中は登録がなく終了後に登録した学生が多かつたという¹⁴⁾ものや、技術科の教育実習において、大学と附属学校間で体系化した指導方法を構築する目的で、大学教員と学校教員による、授業評価チェックシートの開発を行ったもの¹⁵⁾があつた。

SNS を利用し、学習指導案や授業動画に指導教員がコメントを記入することで学生と大

学教員が振り返り可能なシステムの開発を行い効果があつた¹⁶⁾とするものも見られた。

2. 自己評価

1) 教育実習全体の自己評価

自己評価結果の分析から、三好¹⁷⁾は、総合評価の決定に影響する評価項目の特定と評価タイプによる学生の特徴の要約を行い、実習評価の傾向や、学生の特徴をつかむための手立てとして評価が有用であるとした。

白井¹⁸⁾は、自らの学びを振り返り大学での学びにつなげるため、「教育実習評価基準」及び「リフレクションシート」を基に、自己評価に取り組ませた。特に評価規準の設定の意味とその活用及び ICT の活用が課題であると述べている。

柘川¹⁹⁾は、実習後の学習継続意志の変容に目を向け、自己評価を行うことで、将来教師を目指す学生に「教師力」「人間力向上」のために学習継続の意志の形成など質的変容へと向かわせるとした。前田²⁰⁾は、実習について、充実した成果を収めており、教科指導・授業、生徒指導、部活動、指導教員との関係において肯定的記述が8割であるとし、困難や悩みは授業が5割を超えると述べている。木原ら²¹⁾は、「教育実習観察」の効果を焦点化し、「中学校」「授業」「教育実習」のイメージが高い割合で深まり、課題として、教育内容や教材研究、授業作り、学習指導案の作成過程を上げている。小林ら²²⁾は、実習生が単独で自己評価表を活用した場合でも、十分にその有用性を享受できるとし、特に、形成的な実習経験の構築、省察的な態度及び実習後の課題把握と探求的な姿勢の形成に優れた効果を発揮しているとした。

溝口ら²³⁾は、学生に自分の授業に関する評価表を作成させ、授業を受けた生徒の評価を意識しながら実習に取り組ませた。

2) 教職ポートフォリオ等を活用

山崎²⁴⁾は、実習を通して、自らの教育実践力がどのように変化したかを調査し、「教職実践ポートフォリオ」の指標は学生が教育実習を振り返る指標としてだけでなく、身につけるべき教育実践力の具体を示すものとなる。教育実践力を身につけることができる実習となるよう内容を充実させると同時に学生にとって意味ある指標となる必要性を述べている。

谷塚ら²⁵⁾²⁶⁾は、相互評価に着目し、教職 e ポートフォリオに記述された相互評価のコメントの特徴を明らかにした。実習生間の相互評価コメントは、相互評価対象者が教職 e ポートフォリオに書いてある内容を参照・引用しコメントをすることを明らかにした。さらに、自己評価機能、学生間の相互コメント機能を有する e ポートフォリオシステムを開発し、受けた教育を振り返り、目指すべき教師像の明確化と自らの資質力量の現状維持には効果があるが、これからの見通しを持つことには寄与していないことを明らかにした。

3) 教科等による自己評価

太田²⁷⁾は、教師としての力量を自己評価する際、教育実習での実践のあり方がその判断の準拠になり、実習以外の養成教育、課外活動の効果は見られなかったとした。

見島ら²⁸⁾は、実習生の指導案作成の「つまずき」を調査し、教材研究の段階でのつまずきが一番多く、9月実習段階では授業構成の段階でつまずいていることを明らかにした。

3. 実習校教員と学生の評価との比較

実習校教員評価と学生の自己評価の比較より課題を探り、今後の学修に活かすものとして、増井ら²⁹⁾は、実習基準の見直しの目的で比較を行った。教師力に関する評価は実施前、中、後ともあまり変化がなく、高かった項目

は、「積極的に生徒と関わる」「授業の反省批評を生かす」「実習の達成目標」「直実に勤務する自信」であることを明らかにした。

熊谷³⁰⁾は、教科指導における評価の比較では、模擬授業における生徒役の授業評価のデータを分析し、同じ授業を教育実習で行い指導教員の評価データと関連させ、学生の授業をとらえる視点を検討した。主要な因子は、「分かりやすい授業」と「活気ある授業」で、有意差は認められなかった。学生は、主観的、感覚的構造でとらえ、指導教員は「教育的視点」でなされているとした。

4. 教育実習前後の自己評価の比較

実習前後の自己評価の比較から課題を探り今後の指導に活かすものとして、田中ら³¹⁾は、自己評価票の分析から小学校教育実習の学びと意識の変化について明らかにした。小学校教育実習後に「教員の在り方」「実践的な授業力」「学校・学級経営」の3領域の自己評価の向上と教職に就くことへの意欲向上に効果があり、自己評価はすべての項目で有意差がみられ、時期が移行するごとに高くなる結果であるとした。

神原ら³²⁾は、実習意欲や実践的資質能力に関する意識変容およびそれらと実習指導の関連について、実践的資質能力のうち意識変容の著しい項目は、「実際の授業で臨機応変に対応する力」「生徒（子ども）理解」「授業のための技能」である。実践的資質能力の意識変容に寄与した項目は、「授業内容そのものへの理解」「授業評価」「子ども理解・把握」「子どもへの接し方・コミュニケーション」であることを明らかにした。

三島ら³³⁾は、学習の継続意志の変容の影響要因について教師効力感の変容や実習の自己評価と関連させて検討した。授業実践に対する教師効力感が高まるような教育実習を経

験する事が部分的ではあるが実習生の学習の継続意志、特に理論的な学習内容に関する継続意志の上昇に重要なことが示唆された。また、自己効力感が高まることで、ますます学習の必要性を感じていた。これは、実習で教師としての自信を向上させた実習生がそのことで満足せず、さらに学習を継続させていく必要性を感じていることを表している。

松宮³⁴⁾は、「教育実習経験知」を構成概念としたモデルを構築し、教育実習の効果として教職に対する自己肯定感や自己効力感が有意に高くなると同時に英語そのものに対する不安意識も有意に高くなっていることが判明したとした。相良ら³⁵⁾は、客観的な自己評価は実際の成績とかなり一致するが、他の教員とのコミュニケーションなど、自分の努力では解決しがたいものは、自己評価と成績評価とは一致しないとした。

5. 教育実習評価と他の評価との関連

教育実習評価と他の評価との関連として、溝部ら³⁶⁾は、GPAと教育実習評価の関係を授業の受講の在り方やカリキュラム構成の基礎資料にするとともに教育実習生に求められる力を実習校と大学がお互いに開発活用する目的で調査した。共通教育科目、教科教育法、教職科目のGPAの高い学生ほど「教材研究」「教職に関する自覚」「授業展開」「事務・実務能力」の評価が高いが、教科科目との相関は認められなかった。

堤ら³⁷⁾は、評価ポイントを実習生に明確化させることを目標に、詳細な自己評価表を作成し、自己評価させ、他者評価項目と自己評価項目の関係、他者評価項目、自己評価項目と性格特性の関係の分析を行った。他者評価と性格特性、自己評価と性格特性は、強い関連性は見られなかったものの評価のポイントに関わるような関連性が見出されている。今

後、エゴグラムや性格検査による性格特性と評価ポイントとの関連性を学生が知りそれらを活用でき入れていくことが考えられるとした。西出³⁸⁾は、教員としての資質の育成度を教育改善の視点とし、判断を外部評価に託し、5年間の評価で指摘された事項を大学の授業改善事項とした。

6. 実習校指導教諭からの評価を分析

実習校指導教諭の評価を分析し、今後の評価に活かすものとして、菱田ら³⁹⁾は、3年間の成果を教育実習評価票の分析を通して明らかにし、教育実習の課題を事前指導に反映させると共に学校インターンシップ検討の基礎資料とし日々の学校生活を含め指導していく必要があるとした。三山⁴⁰⁾は、教壇実習評価をもとに作成した授業評定票を用いて、実習生が指導教諭にどのような観点から評価されたのかを分析した。各評定項目には、指導教諭の多様な授業観・指導観に応じて様々な意味づけを含んでいること、教育実習の最終的な評価には、研究授業の出来栄だけでなく、指導教諭自身の指導観・授業観が大きく働いている可能性を指摘した。

V. 考察

1. 評価基準の改善・開発

教育実習全体の評価基準の改善・開発についての文献は、教職課程で入学時より使用しているポートフォリオ評価を使用するもの、学生、実習校、大学の三者が使用できる評価基準を作成しルーブリックによる評価を行うもの、実習での学生の実態から到達目標を作成し、ルーブリックによる評価を行うもの、実習校の指導教員の調査から評価票を作成するもの、実習校の管理職を含む担当者別の評価表の作成をするもの。東京都教育委員会の「教育実習成績評価票」を比較検討し、評価

表作成するものなどがあつた。評価表作成の方法として既存の評価表を改善・改訂するもの、学生、実習校教員に調査し開発したもの、全国の大学に評価基準について調査し、評価の観点についてまとめたもの、全国の教員養成大学、付属学校の主任に調査し評価表を作成したものなどがある。

別惣ら⁴¹⁾は、小学校教員として大学卒業時に養成すべきスタンダードを開発するため、全国の教員、指導主事を対象に調査し、それを教育実習の評価基準として活用している。別惣らが行った方法で評価基準を作成したものは他にはみられない。また、入学時からのポートフォリオを利用し評価につなげるものがみられたが、東京都^{41) 42)}や横浜市⁴³⁾が教員養成の目標を示したうえで教育実習の評価票を示しているように、教育実習評価も教育実習の評価だけを切り離れたものでなく、入学時から卒業までを見据えた教職課程上の位置づけや視点が必要となる。

また、実習中に作成した指導案を大学の教員や実習前の学生が閲覧できるシステムを開発したもの、SNSを利用し、学習指導案や授業動画に指導教員がコメントを記入することで効果があつたとしたものがあり、2006年の中央教育審議会答申⁴⁴⁾にもあるように、大学教員と実習校の教員が連携して指導に当たる機会を積極的に取り入れて指導に当たるために、タブレット端末等を利用して実習校で作成した学習指導案や学生の授業を閲覧できるシステムの開発を行うことで、学生、実習校教員、大学教員の3者が評価に参加できる体制の可能性が期待できる。

2. 自己評価

学生の自己評価に関する文献では、評価結果から実習での効果や課題を探り、今後の指導に活かすものが多かつた。

課題としては、評価規準の内容を学生に周知させることとその活用方法、指導案作成の技量、授業に関する知識、スキルの向上と児童、生徒への接し方、自身の資質能力の向上、教材研究が挙げられた。また、評価タイプによる学生の特徴をつかむための手立てとして評価が有用であることや、実習生が単独で自己評価表を活用した場合、形成的な実習経験の構築、省察的な態度及び実習後の課題把握と探求的な姿勢の形成に効果があることが示唆された。自己評価の結果から教育実習後に「教員の在り方」「実践的な授業力」「学校・学級経営」の自己評価の向上と教職に就くことへの意欲向上がみられたという報告があることや「実習校の教員の評価」を比較することで、実習での効果や課題を見出すことができている。しかし、その前提となる教育実習で何をどのように学ばせるかといった目標が明確になっていないと、評価を行うことは不可能である。

3. 実習校教員評価と学生の自己評価の比較

実習校教員評価と学生の自己評価の結果を比較し、評価が異なるものは、子どもとの関わりや、記録、指導案の記入に課題があるとしている。また、大坪ら⁴⁵⁾による「自己評価が正確でなければ具体的な課題を見出すことができない」という研究結果から学生が自己評価を正確に行う指導も大切である。「教科指導」と「学習評価」は、実習校と学生共に低く、取り組みが必要である。また、実践的指導力の育成については、教員養成全体を通しての取り組みが必要である。

4. 実習前後の自己評価の比較

教育実習後に「教員の在り方」「実践的な授業力」「学校・学級経営」の自己評価の向上と教職に就くことへの意欲向上がみられ、また、

時期が移行するごとに自己評価が高くなる傾向にあるという結果が多く見られた。

仲矢ら⁴⁶⁾によると、実習に対する不安は実施前に高く、特に授業に対する不安が高い。教職志望度や教員採用試験受験意思は実習の充実度が高い学生が高まるという事を明らかにしている。そのため、教育実習前の不安を減少させるために授業に対する指導の充実が必要とされる。

実践的資質能力のうち意識変容の著しい項目は、「実際の授業で臨機応変に対応する力」「生徒理解」「授業のための技能」であり、授業実践に対する教師効力感が高まるような教育実習を経験することが、実習生の学習の継続意志、特に理論的な学習内容に関する継続意志の上昇に重要なことが示唆された。2006年の中央教育審議会答申において「教職実践演習」が新設され、4年次の後期に実施されることになった⁴⁷⁾。到達目標は教員として最低限度の資質能力が身についたかを確認するものとなっている。上森ら⁴⁸⁾は、「教職実践演習」における知識技能には、大学の教職課程内で身につけるのが望ましいものと、現職における経験を踏まえて身につけるものとが含まれているとし、教育実習中に特に学ぶべきことを示し、実習後に教育実習の経験がキャリア形成に果たした意義を省察させそれを実習後の学修に反映させるような指導が必要であったとした。

5. 教育実習評価と他の評価との関連

教育実習評価と他の評価との比較については、関連性のあるものや関連の認められないものなどがあることが分かった。「模擬授業評価」と「教育実習の授業評価」の比較では、学生と実習校教員の評価の観点が異なることが示された。「教育実習評価」とGPAの関係では、GPAの高い学生ほど「教材研究」「教

職に関する自覚」「授業展開」「事務・実務能力」の評価が高いという結果であった。

実習評価については、教員が学生を評価するというものがほとんどであるが、教育実習の成果を外部評価により評価したものは他に見られなかった。

6. 実習校指導教諭の評価の分析

授業評価においては指導教諭の指導観・授業観が大きく働いている可能性が示唆されている。教育実習を充実したものとするため、事前に大学側が指導すべきことや、実習校と大学側の連携をいかに深めるかについての考察が必要である。

教育実習は、「教職実践に関する科目」に位置づけられている。実習評価は、「自己評価」と「実習校教員による評価」が行われており、科目としての評定は、「実習校教員による評価」を基に大学教員が行っている現状がある。学校種や評価内容で分類したが、高等学校（看護）の教育実習評価の文献は見られなかったが、別惣らが小学校教員として卒業までに必要となる資質能力のスタンダードを作成し⁷⁾、それを基に教育実習評価域を作成したように、学生、実習校教員、大学教員の3者が納得して使用できるものに改善することが望まれる。

VI. 結論

CiNii Articles で「教育実習」「評価」で得られた123件を分析対象とし、内容で分類すると、「評価基準の改善・開発」、「自己評価」「実習校教員評価と学生の自己評価との比較」、「教育実習前後の自己評価の比較」、「教育実習評価と他の評価との関連」「実習校指導教諭からの評価を分析」に分類された。高等学校（看護）の教育実習評価の文献は見られなかったが、評価表作成にあたり、東京都教育委員会や別惣らが学生が卒業までに身につ

ける資質能力を示したうえで教育実習の評価表を示すことや、教育実習校の教員だけでなく大学教員も協働して評価を行うシステムの開発や、学生が自己評価を行うことによりリフレクションを行い、その後の教員としての向上心に寄与していることなどが示唆された。高等学校（看護）の教育実習評価表作成にあたり、これらのことを参考に実施したい。さらに、教育実習の評価だけを切り離したものでなく、入学時から卒業までの教職課程のカリキュラムの中で教育実習をどのように位置づけ、どのような目標をもって臨むかといった視点が必要となることが示唆された。

本研究における利益相反はない。

本研究は科研費補助金基盤研究 C, 課題番号(19K02718)の助成を受けて行った研究の一部である。

文献

- 1) 文部科学省 (2006) : 平成 18 年 7 月中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度のあり方について」, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm(2018/3/21)
- 2) 文部科学省 (2015) : 平成 27 年 12 月中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員資質・能力の向上について」参考資料その 1, http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiefieldfile/2016/01/13/1365896_04.pdf (2018/3/21)
- 3) 文部科学省 (2017) : 教職課程コアカリキュラムのあり方に関する検討会, http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiefieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf(2018/3/11)
- 4) 前掲 1)「教職実践演習(仮称)」の新設・必修化
- 5) 竹下俊治, 齊藤一彦, 他 (2019) : ポートフォリオ評価を軸とした教職課程の構造化 教職科目・教育実習科目・教職実践演習の連動性と接続性をどう高めるか, 広島大学大学院教育学研究科共同研究プロ

- ジェクト報告書, 17, 47-56.
- 6) 小泉卓 (2006): ルーブリックを使用した教育実習評価表の特性と構造, 聖徳の教え育む技法, 3, 1-13.
- 7) 別惣淳二, 千駄忠至, 長澤憲保, 他 (2007): 卒業時に求められる教師の実践的資質能力の明確化—小学校教員養成スタンダードの開発—, 日本教育大学協会研究年報, 25, 95-106.
- 8) 小林宏己 (2007): 新しい教育実習自己評価表の開発, 東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要 3, 49-58.
- 9) 山口大学教育学部附属山口中学校 (2010): 効果的な教育実習評価のあり方—評価基準項目に着目して—, 学部・附属教育実践研究紀要, 9, 19-28.
- 10) 岩田昌太郎, 嘉数健悟 (2008): 教育実習における評価規準の項目に関する研究, 広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部文化教育開発関連領域, 57, 293-300.
- 11) 林徳治, 黒川マキ (2015): 大学および実習校による教育実習評価の実証研究 I—大学と実習校による均等性を担保した教育実習評価研究の概要—, 日本情報教育学会, 31, 192-195.
- 12) 宮下治 (2015): 教育実習評価票に関する現状と課題に関する一考察—愛知県内連携 5 大学と東京都教育委員会の評価表の比較から—, 愛知教育大学研究報告 教育科学編, 64, 111-117.
- 13) 平野俊英 (2016): 理科指導力育成に向けた教員養成評価指標の開発研究—理科教育法科目と理科教育実地研究の枠組み再構築—, 愛知教育大学研究報告 教育科学編, 65, 187-191.
- 14) 西正明, 三村拓馬, 増井美那, 他 (2013): 教育実習において添削段階にある学習指導案の登録閲覧システムの開発と評価, 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 14, 21-30.
- 15) 向田識弘, 川路智治, 堤健人, 他 (2017): 技術科教員養成における大学と附属学校間での体系化した指導方法の検討, 広島大学学部・附属学校共研究機構研究紀要, 45, 111-121.
- 16) 尾崎拓郎, 仲矢史雄 (2014): コメント指導が可能なオンライン授業動画および提出物をデジタル管理可能にする教員養成用 SNS の開発, 情報処理学会研究報告, 14(4), 17-20.
- 17) 三好信幸, 村井千寿子 (2019): 教育実習における実習評価表データを活用した指導の検討, 精華女子短期大学研究紀要, 45, 1-10.
- 18) 白井重樹 (2015): 授業力の形成に向けた指導と課題—教育実習受講者の自己評価結果から—, 滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 23, 55-60.
- 19) 餅川正雄 (2009): 高等学校における教育実習に関する研究 (IV), 広島経済大学研究論集, 32(3), 43-67.
- 20) 前田一男, 佐藤良 (2014): 教職課程の学生による教育実習に関する経験-教育実習における困難とその解決-, 教職研究, 24, 立正大学教職課程, 91-104.
- 21) 木原誠一郎, 松浦伸和, 井上弥, 他 (2009): 「特色ある教育実習プログラム」の実施に関する研究 (II) -「教育実習観察」の効果に関する調査研究-, 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 37, 21-30.
- 22) 小林宏己 (2006): 教育実習生のための自己評価表の活用, 東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要, 2, 35-42.
- 23) 溝口繁美 (2018): 教育実習を単なる実習で終わらせないために—教育実習への授業評価導入の試み—, 神戸親和女子大学言語文化研究, 12, 85-98.
- 24) 山崎光洋 (2010): 教育実習における学生の教育実践能力についての意識に関する考察, 岡山大学教育実践総合センター紀要, 10, 81-86.
- 25) 谷塚光典, 東原義訓, 喜多敏博, 他 (2015): 教職 e ポートフォリオの活用による教育実習生の自己評価および相互コメントの効果, 日本教育工学会論文誌, 39(3), 235-248.
- 26) 谷塚光典, 東原義訓, 喜多敏博, 他 (2015): 教職 e ポートフォリオの活用による教育実習生の自己評価および相互コメントの効果, 本教育工学会論文

- 誌, 39(3), 235-248.
- 27) 太田拓紀 (2011): 教師としての力量の自己評価に対する教育実習の影響, 玉川大学教師教育リサーチセンター年報, 2, 15-23.
- 28) 見島康司, 小原友行, 池野範男, 他 (2016): 教育実習のための効果的な指導方法に関する研究(1) - 実習生の指導案作成におけるつまづきの分析 -, 広島大学学部・附属学校共同研究紀要, 44, 297-306.
- 29) 増井千世子, 原寛暁, 松前良昌, 他 (2016): 音楽科における指導力の向上をめざした効果的な教育実習のあり方に関する研究 - 生徒指導と教科専門の観点から -, (2), 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 44, 95-102.
- 30) 熊谷信順 (2010): 教育実習生の「学習指導技量」形成に寄与する教育実習事前指導の構築(4) - 模擬授業生徒役による授業評定と教育実習指導教員による学習指導法評価の関係 -, 東亜大学紀要, 11, 51-62.
- 31) 田中るみこ, 岡田充弘, 石田靖弘, 他 (2019): 小学校教育実習の学びと意識, 中村学園大学発達支援センター研究紀要, 10, 85-92.
- 32) 神原一之, 秋山哲, 川口浩, 他 (2012): 教育実習指導の効果に関する研究 (II) - 附属東雲小学校および同東雲中学校における実習生の意識変容に基づく検討 -, 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 40, 29-33.
- 33) 三島知剛, 安立大輔, 森敏昭 (2010): 教育実習生の実習前後における学習の継続意志の変容: 実習前後の教師効力感の変容・実習の自己評価に着目して, 学習開発学研究, 3, 91-99.
- 34) 松宮信吾 (2016): 教職課程認定大学における教育実習の実施効果の健勝に関する研究 - 関西外国語大学の事例を中心として -, 研究論集, 103, 119-135.
- 35) 相良麻里, 相良陽一郎 (2012): 教育実習に関する効果的な事前・事後教育の検討 - 教育実習生の自己評価に関して -, 千葉商大紀要, 49 (2), 135-147.
- 36) 溝部ちづ子, 石井眞治, 財津信子, 他 (2016): 教職志望学生における在学時学業成績と教育実習評価の分析, 比治山大学短期大学部教職課題研究 2, 8-19.
- 37) 堤幸一, 山根薫子 (2006): 教育実習の評価と性格特性の関係 - より正確な自己評価のために -, 就実論叢, (36), 37-51.
- 38) 西出 (2014): 外部評価を活用した授業改善 - 教育実習を通しての外部評価の活用 -, 國學院大学・北海道短期大学部紀要, 31, 29-62.
- 39) 菱田隆昭, 柴内靖, 田口久美子 (2018): 教育実習の充実に向けた事前指導の強化について - 実習校からの評価を生かす観点から -, 和洋女子大学教職教育支援センター年報, 3, 10-16.
- 40) 三山緑 (2010): 教育実習生の「学習指導技量」形成に寄与する教育実習事前指導の構築 (3) - 実習生の研究授業を評価する実習校指導教諭の視点に関する分析 -, 東亜大学紀要, 11, 35-49.
- 41) 東京都教育委員会 (2010), 「東京都教職課カリキュラムの策定」, <http://www.metro.tokyo.jp/tosei/hodohappyo/press/2017/10/26/16.html> (2018/3/24)
- 42) 東京都教育委員会 (2017), 「東京都教職課程カリキュラムの策定」教育実習: 41-54.
- 43) 横浜市教育委員会 (2018): 教育実習サポートガイド, <https://www.edu.city.yokohama.jp/tr/ky/kcenter/daigakurenkei/support-guide.pdf> (2019/9/19)
- 44) 前掲 1) 教職課程の改善・充実
- 45) 大坪祥子, 小沢拓大 (2016): 実習後の自己評価の正確性と学生が見出す課題の関連性, 宮崎学園短期大学紀要, 9, 29-35.
- 46) 仲矢明孝, 三島知剛, 高旗浩志, 他 (2015): 3年次教育実習に関する学生の意識の検討 - 平成2年度受講生アンケート結果から -, 岡山大学教師教育開発センター紀要, 5, 26-34.
- 47) 上森さくら, 添田晴雄, 滝沢潤, 他 (2011): 教育実習生の実習前後における学習の継続意志の変容 - 実習前後の教師効力感の変容・実習の自己評価に着目して -, 学習開発学研究, 3, 1-13.